

ゴーギャンが作った版画は一体何点ぐらいであったか？ 80点余りである、と知ると、そんなに沢山あるのですか、と驚く人が多い。思うにそれはゴーギャンの版画に触れる機会が少いことが原因のひとつであろう。また同時代の後期印象派の大家であるセザンヌやゴッホの版画作成点数が極めて少いので、自然ゴーギャンも少いのではないか、と思うのかもしれない。因みにセザンヌは8点、ゴッホは10点の版画を作成しているが、これにくらべるとゴーギャンは多いといえる。

ゴーギャンは木版の作品が多い。その理由は恐らく彼が木彫りの彫刻を作成していたこと、また彼の絵画の特徴である平面性が木版のもつペタリとした色面と共通していることなどからみて彼は木版のメディアが気に入っていたのではないかと想像する。

今回の展示はパステル(「タヒチの人」1903年)を一点まじえ、彼が1894年頃作った木版を1921年に息子のポーラが刷り10点1セットのポートフォリオ、通称「ノアノア」のシリーズを中心に、別途8点の版画(うち3点は「ノアノア」の作品と重複している)をならべることとした。ゴーギャンの版画芸術については乾由明氏が別冊のカタログで解説されているのでご参照いただきたい。

ところで、「ノアノア」とパステルと乾由明氏の解説で一冊の展覧会カタログがあるにもかかわらず、敢えてさらにこのような小冊子を作ったのは理由がある。それは数年前始めてゴーギャンの木版「宇宙創造」(図録No3、案内状にはこの作品を使用した)を手に入れ、ゴーギャンの木版の美しさに魅せられ、爾来ただいま8点の作品

を手元に集めることができたので、これはやはり記録として残しておきたいという気持がおさえがたかったためである。

この展覧会を準備しているうちに各種の資料を見る機会を得た。そのなかで1959年のゴーギャン版画展のカタログ(シカゴアート・インスティテュートおよびメトロポリタン美術館主催)に掲載されたH・エドワーズ氏の解説は一読して紹介の価値ありと思ったので巻末に載せることとした。ただこの解説は20年前に書かれたものであり、その後ゴーギャンの版画についての研究は進んでいるという事情が考慮されてしかるべきであろう。

エドワーズ氏は「いちぢくを売る女」(図録No8)をゴーギャンの作とみていいとされるが、これは疑問を持たざるを得ない。それから、息子のポーラの摺った木版は初版にくらべるともの足らないとされるが、それはその通りであろう。しかし20年たった現時点では、初版の作品を手に入れることは至難のことで、どうにかポーラの摺ったものが手に入る状況である。それにご覧の通りポーラの摺りは実際美しいのである。以上ひとこと申し添えておきたい。

最後にこの展覧会がこのようなかたちで開催できるのは「アートサロン高島」の高島良朋氏の好意によるところが大きい。また作品や参考資料の収集さらには翻訳等で示された若い友人たちの協力も忘れるわけにはゆかない。改めて感謝の意を表する次第である。

1979年7月5日 佐谷画廊

佐谷和彦